山日 e ライブラリー

フォーカスやまなし

—山梨日日新聞企画報道グループ

SAMPLE

目次

プロローグ …… 5
1 「甲州種ワイン」にかける～一家3代の挑戦 …… 6
2 山中湖フジマリモ「絶滅」から復活へ …… 24
3 富士山噴火に備えて …… 39
4 戦争伝える山梨平和ミュージアム …… 55
5 世界一スモモ「貴陽」誕生の物語 …… 71
6 カレッジスポーツの飛躍 …… 89
7 東電マンの日常～3・11後の使命 …… 107
8 戦場ジャーナリスト・山本美香の原風景 …… 126
9 ワインツーリズムの挑戦 …… 145
10 大村智「化学と芸術」2つの感性 …… 164

SAMPLE

プロローグ

山梨を舞台に、話題を集めている出来事や人物に焦点を合わせ、深く取材して一つのストーリーを描こう―。そんな思いを「フォーカス」（焦点）というタイトルに込めた企画です。２０１２年7月1日付から隔週の日曜の紙面に掲載しました。紙面掲載の形式も工夫し、1面に導入部を配置、中面の1ページ特集へ展開するスタイルとしました。1回読み切りで、記事、写真の量は通常の連載の4～5回分に相当します。老舗ワイナリーの挑戦、富士山噴火への備え、戦場に散ったジャーナリスト…。山梨日日新聞の記者が目を凝らして見つめた多彩な「フォーカス」の世界。上巻には10の物語が収められています。

山梨日日新聞編集局企画担当デスク　高橋一永

※各章冒頭の日付は、連載時の紙面掲載年月日です。

SAMPLE

1 「甲州種ワイン」にかける～一家3代の挑戦

（2012年7月1日付）

「二流」から唯一無二へ

「甲州と心中してください」

1987年2月、甲州市勝沼町藤井にある農協売店の食堂に、中央葡萄酒（甲州市勝沼町等々力）の三沢茂計（しげかず）の声が響いた。「産地として甲州種ワインを守る」ことを旗印に結成された、勝沼ワイナリーズクラブの初めての会合。物騒な言葉とこわばった表情が、顔をそろえた町内12ワイナリーの若手醸造家に三沢の覚悟を伝えた。

あれから四半世紀。63歳となった三沢は淡々と振り返る。「退路を断って、甲州種ワインの醸造と向き合ってほしいとの思いから出た言葉だった」。当時、日本固有のブドウ品種「甲州」をめぐる状況は、悪化の一途をたどっていた。

SAMPLE

「心中」発言の5年前。三沢は10年勤めた三菱商事を辞め、父親の故・一雄の手ほどきでワインの醸造を始めた。23年の創業で、三沢は4代目。いずれ継ぐものと思っていた。北海道や長野など他産地との競合が激しさを増す中、「甲州」を原材料としたワインをつくることで、唯一無二の産地を築ける。そう信じていた。

甲州種ワインへの思い入れの強さは、父親譲りだ。中央葡萄酒の地下のワインセラーには、一雄が手掛けた1957年の甲州種ワインが今も大切に保管されている。ラベルには、ギリシャ神話で美をつかさどる女神にちなんだ「グレイス」の名が、英文字でつづられている。店頭販売に向かない「はねだしブドウ」を使って醸造し、一升瓶から茶わんに注いで飲む習慣が一般的だった当時、「ボルドー型」と呼ばれる形状のボトルで甲州種ワインを販売するのはまれだった。

「在庫を抱えるくらいだから、ほとんど売れなかったんだろう」。三沢はそう言うが、「GRACE」とともに印刷された「フランスワイン」の文字に、「本物」を追求し続けた先代の矜持がにじむ。

父親の志を継ぎ、甲州種ワインの質向上と普及に取り組んだ三沢。その情熱に冷や水をかける出来事が起きた。円高ドル安を誘導する、85年の「プラザ合意」。1ドル250円だった相場は1ドル140円に急騰した。ワインは国境を越えて

SAMPLE

取引される。円高になれば海外産が安く国内に入ってくる。日本のワイン業界に強い危機感が広がった。

「甲州」は欧州系の醸造用ブドウに比べ糖度が低く、アルコール度数が上がりにくい。抜栓時に香りが立ち上りにくく、第一印象が曖昧になりがちで、アルコール度数を高めるため、発酵の段階で糖分を追加する「補糖」の作業が必要だった。

手間がかかる品種より、安価な醸造用ブドウによる海外原料を使った方がいい。市場には輸入原料で醸造されたワインがあふれ、いつしか「甲州」には「二流」の烙印が押された。

「世界と戦うのは夢なのか」。折れそうな三沢を支えたのが、甲州種ワインへの情熱と産地勝沼を守りたいという思いだった。「輸入物に価格では勝てない。品質で勝負するしかない」。それには産地全体で取り組む必要があった。三沢と考えをともにする、同年代の仲間が集まって結成したのが、勝沼ワイナリーズクラブだ。三沢が初会合で語った「心中」発言は、当時の勝沼が置かれていた状況を映し出していた。

SAMPLE

SAMPLE

中央葡萄酒の地下ワインセラーに貯蔵されている１９５７年の甲州種ワイン。琥珀（こはく）色に輝く色みが、半世紀の時の流れを物語る＝甲州市勝沼町等々力